

明治期末の松江市における音風景について

——楽隊の普及との関連から——

上野 正章

本論は明治後期の松江市におけるサウンドスケープ研究である。楽隊の普及が音環境への関心を呼び起こし、さらには望ましい音環境を作るという考え方を引き起こした過程を明らかにする。

まず、明治31年に行われた岡山孤児院の慈善会の概要を調査し、松江市における最初期の吹奏楽の状況を明らかにする。次いで、師範学校の音楽科教員の堤正夫によって組織化された高等音楽隊の活動について述べる。これが松江市における最初の本格的な楽隊活動で、儀式や野外イベントで活躍した。その後、日露戦争がきっかけになって突如として出現したアマチュア楽隊について議論する。楽隊の発する大音量は騒音問題を引き起こした。そして最後に、吹奏楽の郡部への普及について簡単に触れる。

キーワード：サウンドスケープ、島根、洋楽受容、吹奏楽、日本音楽

序

「子供に関する用品を蒐集陳列して教育衛生の発達に資すると同時に子供に清新なる娯楽を与ふる」〔無記名b 1911:3〕ことを目的として、明治44年(1911)5月16日から29日まで2週間にわたって松江市の城山公園で開催された島根県子供博覧会は、県下初ともいえるべき空前の規模の大博覧会であった。図1は会場地図であるが、広大な敷地に展開された子供図書館、模擬郵便局、動物園、活動写真、植物温室、児童電話、大時計といった施設を認めることができる。また、陳列場にはありとあらゆる子供用品が平面上に整然と分類され、陳列され、子供文化が一望できる視座が提供された。多くの人々は初めて出会う近代的な光景に衝撃を受けたに違いない〔吉見 1992〕。そして、音に関しても同様に趣向の凝らされたものであった。

子供に取つて一番嬉しいのは本丸で、〔〕青葉かくれの楽隊は終日^{りやうりやう}晝々たる妙韻を奏し葉桜の下の大達磨は毎日叩かれたり蹴られたりして^{いち}窘められ回転機は^{いち}間断なく回り、でんでん太鼓の音は^{どうどう}鑿々と響いていつも子供心を楽しましつつあり〔無記名a 1911〕。

会場には音楽堂(図1の中央上部。千鳥亭の隣)が「旧藩祖直政公の銅像建設地なる楼台の一隅緑陰濃かなる所に建てられたり。形は八角堂にして、^{めく}罅らすに紅白の幔幕を以てす」〔無記名b 1911:87〕という潇洒なもので、「開会中松江育児院山陰家庭学院の少年音楽隊が特に本会の為に毎日午前午後交替に出張し^{りやうりやう}囀るる音楽を吹奏」〔無記名b 1911:87〕した。背後に流れる途切れることの無い音楽は多くの入場者にとって実に新鮮な体験だったに違いない。

博覧会の会計報告を調べると、音楽堂費385円(内訳:楽手報酬200円、設備費185円)という

圖場々會覽博供子



[図1] 島根県子供博覧会案内図 [無記名 b 1911: unpagel]

支出がある〔無記名b 1911:125〕。楽隊演奏は一時の思い付きではなく、博覧会実行委員会の人々が音楽堂の重要性を認めて計画的に事業を進めたことがわかる。また、楽隊が職業的なものであったこともここから判明する。松江市に楽隊が組織化されたのはやっと明治36年(1903)になってからのことであった。わずか9年間のうちに、楽器の演奏技術が広まり、音楽を用いて音環境を調整するという考え方が浸透したのである。

本論は、どのようにして松江市にこれほど短期間の間に新しい音楽の演奏、新しい音の楽しみ方が普及していったのかということをはっきりさせる試みである。はじめて手にした大音量を発する楽器群を人々はどのようにして受け入れ、活用していったのだろうか。

日本近代音楽史の書物を調べればすぐに判明することのように思われるかもしれない。しかしながら、これがなかなか一筋縄ではゆかない問題なのである。というのも、多くの日本近代音楽史は東京の音楽文化が中心に述べられており、地方の状況に関してはほとんど言及が見られない。多くの書物では近代日本の吹奏楽の歴史が軍楽隊や市中音楽隊から説き起こされるが〔塚原 2001、堀内 1942〕、松江市のケースは全くこのパターンにあてはまらない。演奏しているのは市中音楽隊ではなく孤児院の楽隊であるし、松江市には当然のことながら軍楽隊は無く、音楽堂もない。

本論では、当時新聞がどのように読者に読まれていたのかということに注意を払いつつ、過去を再構成してこの問題を明らかにする。新聞資料に着目したのは、明治後期に関しては、新聞ほど詳細に過去が書き記されているものは無く、また、当時流布した文章でもっとも多くの人々が目にしたものは新聞だからである。音楽及び音環境関連の記事を拾い出して調査を進めていった。

取り上げたのは『山陰新聞』である。朝刊4ページの新聞が毎日発行されていたので、相当詳しい状況まで調べあげることができる。また、幸いなことに当時の『山陰新聞』はほぼ完全なたちで遺されているので、楽隊の状況および楽隊についての考え方の推移を辿ることができる。ただし、新聞記事の書き手の視線を十分に批判するまでには至っていない。現時点で『山陰新聞』以外のまとまった資料が無いからである。当時松江市で『山陰新聞』に拮抗して発行されていた『松陽新報』を調査することができれば、幾分状況が改善されるかもしれない。しかしながら、この時代の『松陽新報』は現存せず、手を尽したが発見することができなかった。

また、新聞の読者に対する作用を考える際に重要なことは、当時の松江市においてどの程度新聞が読まれ、重視されていたのかということをはっきりさせることである。しかしながら、これもまた難しい問いである。数値化できず、手がかりも少ない。とりあえず、当時の教育・文化の状況を総合的に鑑みて、一定の効力があつたと判断して研究を進めることにした。おそらくこの問題は言説研究や文化史研究の進展によって、将来的には徐々に明らかになっていくのではないだろうか。なお、このテーマについての先行研究を認めることはできなかった。

調査に用いた資料は、鳥根県立図書館および国立国会図書館所蔵の当該新聞のマイクロフィルムである。鳥根県立図書館、国立国会図書館、鳥根大学附属図書館に所蔵されている新聞原紙から作成された資料である。研究は単独で行った。幾らかの見落としや誤りが残っているかもしれない。しかし、共同研究のかたちを取らなかったのは、記事を読み解き、検討する思索の一貫性を重視したからである。

1 岡山孤児院による巡回幻燈会

明治期における松江市の音楽文化の状況は不明なことが多いが、明治31年(1898)6月に岡山孤児院の巡回幻燈会が行われている。〔菊池 1997: 69-121〕。おそらく大きな影響を与えたに違いない。この当時、余興とはいえ、当地において楽隊の演奏は極めて珍しいものだったからである。事前の情宣は「岡山孤児院は現時生徒二百数十名を有し規模頗る広大のものなるか〔、〕^{〔このたび〕} 這般役員をして各地方を巡回せしめ賛助を求むる由にて此の程同役員来松〔、〕^{〔みじつ〕} 不日当市にて音楽幻燈会を開くといふ」〔無記名 a 1898〕という簡単なものであった。しかし、おそらく町中に噂が広まったのだろう。会場は人であふれた。「彼の岡山孤児院の基本金募集幻燈音楽隊は去四五の両夜天神栄徳座に於て幻燈音楽を催せるか〔、〕聴衆は殆んど立錫の余地なかりし」〔無記名 b 1898〕という報告が遺されている。栄徳座は芝居劇場の名称である。2回公演を考慮すると、相当多くの人が楽隊の演奏に触れたのではないだろうか。

もちろん多くの人々は幻燈で映写される映像に惹かれてやってきたに違いない。新聞報道も挿絵でおこなわれている当時、映像に触れる機会は無かったに無く、日本や世界の名所・旧跡を映し出す幻燈は大いに魅力的であったからである。しかしながら、耳にした音楽も魅力的に響いたのではないだろうか。

演目に関しては、『石井十次日誌(明治31年)』に簡単なプログラムが残されている。「(7) 幻燈会の順序を定む 1. 奏楽 2. 幻燈 3. 奏楽 4. 幻燈 5. 奏楽」〔石井 1969: 210〕というものである。詳細はわからない。ただし、同書に収録された岡山孤児院慈善音楽幻燈会目録には、レパートリーとして次のような曲目が挙がっている。楽器が吹奏楽と風琴、ジャンルが邦楽、軍楽、洋楽、そして僅かの明清楽と琉球音楽であったことがわかる。

和曲の部 《君が代》、《愛国》、《越後獅子》、《春雨》、《深ひ深ひ》、《琉球マーチ》、《九連環》、《十日エビス》、《お江戸日本橋》、《浮世節》、《かんかんのー》

軍歌の部 《コンロン山頭》、《敵は幾万》、《威海衛》、《軍艦》、《垂死の喇叭卒》、《雪の進軍》、《平壤の大捷》、《豊島海戦》、《勇敢なる水兵》

洋曲の部 《アンダンテワルス》、《ポルカ(おどりの曲)》、《ホワイトローズ・ワルス》、《マスユット、カドリー(おどりの曲)》、《アクトンソイツクステツプ》、《ヴクトリーマーチ》、《ウエベルチルプ》、《ジヨーシヤンマーチ(舞踊付)》、《プロシヤンマーチ》 風琴の部 《せとのだんだんばたけ》、《松づくし》、《越後獅子》、《春雨》、《洋曲数曲》〔石井 1969: 233-234〕。

また、同団体はその後島根県を巡回するのだが、7月2日、3日の両日をかけて行われた安濃(現在の大田市)教育会の総集会に呼ばれた記録がある。次の通りである。「君か代、愛国、敵は幾万、黄海の大捷、春雨、舞踏、威海衛、越後獅子等数曲の合奏あり」〔無記名 c 1898〕。ここでも邦楽、軍歌、洋楽を指摘できる。楽隊の人数と編成から考えて、松江市でも同じようなレパートリーを演奏していたと推測できる。

金管楽器の響きは当時の多くの人々にとって新鮮に響いたことだろうが、聴きなれた邦楽や軍隊の音楽は身近さを演出したことだろう。ただし、これらの音楽がどのような編曲によるものかということや演奏技術に関しては不明である。その他、プログラムから判断すると音楽は幻燈の合間に

鳴らされたのであり、幻燈にあわせて音楽が演奏されたのではないことがわかる。

2 初期の楽隊

19世紀末に外からやって来た巡回楽団の松江公演の概要を示したが、続けて新聞を繰っていくと、その後、鳥根県の郡部でもしばしば幻燈会が開催され、楽隊が演奏した記録を見つけることができる。例えば、次のような集会が行われている。

第一回を去る八日稲用小学校に開く〔。〕教育会より植木同〔安濃〕郡視学吾卿大田小学校長を派遣し定刻前より会場指して集ひ来れるもの無慮二百余名満場立錫の余地なきに至れり〔。〕定刻を報するや平塚同校長開会の辞を述べ〔、〕次に就学奨励修身談女子教育日清戦争等に関する映画百余枚を出して派遣員及平塚龍末両教員等交々勇壮活発に是が説明を為し聴者をして大に感動せしめ〔、〕又時々ポンチ絵を出して滑稽諧謔にして抱腹絶倒せしめ〔、〕尚楽隊は時々囁々たる音楽を吹奏して興を添へしなど非常の盛会なりき〔無記名 a 1903〕。

道徳教育、戦況報告、娯楽という盛沢山なプログラムに混じって、楽隊演奏を認めることができる。ただし、「興を添へし」という表現から、あるいは演奏曲目が記されていない点から、楽曲演奏は主たる目的ではなかったようである。次のような事例もある。

同村〔八東郡本庄村（現在の松江市本庄町）〕小学校雨中体操場に於て教育幻燈会を開きたり〔。〕来会者七百余名〔、〕同副会長の開場の辞に次で正井同村小学校長の教育上の演説あり〔。〕了〔をはり〕て鮮明なる映画に付て同校教員諸氏の熱心なる説明あり〔、〕傍ら音楽を奏して之を助け大に聴衆に感動を与へ満場立錫の余地なき盛会にて午後十二時閉会せり〔無記名 b 1903〕。

同年3月の幻燈会の様子だが、ここでも楽隊演奏を認めることができる。また、「傍ら音楽を奏して之を助け」という記述から幻燈にあわせて音楽が演奏された可能性を指摘することができる。あるいは次の例は簸川郡出西村（現在の簸川郡斐川町）において同年7月に行われた父兄会の様子だが、ここでも音楽が演奏されている。

去廿四日簸川郡出西村阿宮尋常小学校に於て父兄会を開けり一中略一同夜は教育幻燈会を開き同会よりは森脇直江高等小学校長及同校天野訓導の二氏出張せり〔。〕午後八時開会飯塚同校長の演説出張員の説明化学の実験等あり〔。〕其間楽隊の囁々たる音楽と勇壮なる生徒の唱歌あり〔。〕来観者無慮四百余名盛会なりき〔無記名 e 1903〕。

「勇壮なる生徒の唱歌」というのは、おそらく軍歌も交えて歌われたのではないだろうか。化学の実験は、啓蒙とも余興ともとれる。まさか化学の実験にあわせて楽隊演奏が行われたということは無いだろう。そして「其間」という記述から、楽隊の演奏はおそらくプログラムの合間に差し挟まれたことが判明する。

なお、三つの幻燈会の参加者に注目すると、それぞれ、200余名、700余名、400余名であり、誰もがこぞって参加したようである。楽隊の演奏は地域の人々にとって良く知られたものになっていたと判断できる。それでは、村の演奏会ではいったい誰が演奏したのだろうか？

このことに関してはほとんど記述が見当たらない。明治35年(1902)10月10日から12日にかけて八東郡野波村(現在の松江市)において教育幻燈会が開かれた際に「休憩時間に同村小学校教員と青年会との組織に係る楽隊を吹奏せしには聴衆の喝采を博し」〔無記名 1902〕という記述がたったひとつ見出されるだけである。村の有志による楽団を認めることができる。しかしこれ以上の情報を見出すことはできず、詳細は不明である。また、「囃唳」という表現から、行われたものが吹奏楽であることが判明するが、これ以上のことはわからない。

ところで、新聞は地域のニュースを伝えるだけではなく、国内の出来事も多数報道されている。その中にもまれに音楽に関する報道がある。例えば、明治36年(1903)6月に大阪で内国勧業博覧会が開かれるが、その様子がしばしば報告されていて、吹奏楽や蓄音機が紹介されている。例えば図2は余興を描いたものだが、向かって左手に楽隊、右手に邦楽を認めることができる。

確かにこれらは松江市の出来事ではない。しかしながら、多くの読者は興味と憧れを持ってこの図版を眺めたのではないだろうか。遠くから伝えられる都会の先進的な音楽文化は、当地の人々にとっての指針になったと考えることができる。

舞歌興餘會贅協 報畫會覽博



〔図2〕〔無記名c 1903〕

3 高等音楽隊の結成

さて、このような状況が続いた後で、明治36年(1903)の秋に突如として紙上に現れるのが、高等音楽隊に関する一連の報道である。「本市〔松江市〕にて創立の高等音楽隊は其準備追々進捗し已に練習生をも派出せしを以て諸器械其他の整頓(傍点、筆者)するも近きにある由なるが〔、〕寄贈金の申込も続々ありと」〔無記名d 1903〕。つまり、自前で本格的な楽隊を組織しようという試みである。追ってさらに詳しく状況が報道される。

本市〔松江市〕末次本町臨水亭に事務所を設け創立の準備中なる松江市高等音楽隊は既記の如く山田金太郎氏を上京せしめて器械其他の用務を弁せしか〔、〕官民共種々賛成者あるを以て是非とも松江銀■新築落成式迄■整備せんと急ぎ居■り〔。〕同隊設■に付ては東京音楽学校教授山田源一郎氏顧問の任を諾せりと〔無記名f 1903〕。

目的は、松江銀行新築落成の園遊会のためであった。臨水亭は松江市において格式のある料亭である。また、山田金太郎は島根県師範学校の書記である〔無記名m 1903:349〕。そして顧問は山田源一郎。それぞれ第一級の物を揃えていることから力の入り方がうかがわれ、これまでに時々言及される幻燈会の際に演奏した楽隊とは一線を画すものを立ち上げようとしていることがわかる。また、先の引用で「諸器械其他の用務」と記されているのは、おそらく楽器購入と推測される。

高等音楽隊の報道は、それからしばらく途絶えるが、隊員達は猛練習に励んでいたのだろう。同年11月3日の松江銀行新築に際して、城山公園で開かれた園遊会において立派に演奏したことが報告される。

莊嚴の式を終れば老桜参差たる下に幔幕を張れる音楽隊は嚙啞たる壮快の楽を奏なて福引場は盛んに賓客を呼び抽籤を以て景品を定め現物を渡せしに万年杓子を得て重宝かるあれはお多福面を貰ふて子供の笑を受けんと喜ふあり〔。〕其他くさぐさの品物何れも福といふに縁のなきはなし酒に肴に桜餅、煙草に柿にお田、栄螺焼に餅に煎茶お好み次第入ッしやい入ッしやいと九箇の模擬店よりの呼声、樹陰の嬌音春ならさるに何の鶯となつかしかりて到る大繁昌、松江銀行の徽章を染め抜きたる緋縮緬の前垂れにけふを晴れと着飾れる校書の粹一中略一烟火は数発空に轟き陳列所の仮設食堂は次第に破裂せんはかりの大笑、酒酣なる頃松江市長の発声にて松江銀行万歳を三唱し愉快愉快と叫びつつ蹣跚として退散せしは暮色愛宕山頂に霞然たる頃なりき〔無記名h 1903〕。

贅を尽した園遊会は、900名集まったと報じられている。楽隊の響きが宴会の背景に流れ、参加者は思い思いにアトラクションを楽しんだようである。残念なことにこの場合もどのような曲を演奏したのかということとはわからない。ただ、少なくとも同記事に唱歌《松江銀行新築の祝ひ》が掲載されていることから、この歌が演奏されたことは間違い無い。ここにおいて楽隊は幻燈会の余興から飛び出し、野外で望ましい音環境を作り出すという役目を担うことになった。

高等音楽隊は一度限りのものにならずに、活躍を続けたようである。しばしば新聞を賑している。例えば、県立第三中学校の開校式に際して行われた提灯行列では、「夜に入りて本校生徒三百五十余

名は松江音楽会楽隊^{〔つきそ〕}附添へ提灯行列にて町内を巡行せるに〔、〕老若男女は珍らしかりて蟻軍の如く付き随ひ未曾有の盛観なりき〔無記名 i 1903〕と報じられているが、音楽隊も連れ添ったらしい。なお、ここでは、「松江音楽会楽隊」という名称が記されているが、前後関係から、高等音楽隊を示していると思われる。あるいは、赤十字能義委員部総会においても、「松江音楽隊の君ヶ代の奏楽あり」〔無記名 l 1903〕という記述がある。すべての活動が新聞に出るとは限らないので、思うに実に頻繁に演奏の機会があったのではないだろうか。

それでは、高等音楽隊はどのような人々によって担われていたのだろうか。あるいは高等音楽隊は専門的なものだったのだろうか。これらについては、新兵送別会に際して行われる予定であった演奏会に関して「昨日当市新兵送別会に松江音楽会より楽隊寄付の筈なりしか〔、〕突然楽手数名本務の爲め差支を生し出場せざることとなれり」〔無記名 j 1903〕という記述があり、楽隊員は兼業だったことがわかる。ただし詳細な隊員の本務はわからない。指導者については「堤同隊教官」という言葉が出てくる。

松江音楽隊は一昨日の松江銀行新築落成式を以て産声を揚げしを以て同夜臨水亭の洋食室に於て開会式を挙行せり〔。〕列席者は堤同隊教官を始め新聞社員其他数十名にして発企人代表者の開会の辞ありて酒宴に移れる〔無記名 g 1903〕。

唱歌《松江銀行新築の祝ひ》の作曲家として堤正夫が記されていることも考え合わせると、堤正夫である可能性が高い。彼は明治 36 年（1903）9 月 11 日から明治 38 年（1905）3 月 1 日まで島根県師範学校に在任していた〔無記名 1978〕。後に改姓し、大木正夫として日本の唱歌教育界、音楽出版界で大活躍した人物である。師範学校の学友会において「堤教諭は楽器の吹奏に併せて鎌倉山の唱歌を独吟し」〔無記名 k 1903〕たという記事もあり、彼が楽隊と何らかのかかわりを持っていたことはほぼ確かだろう。家族の追想に「山陰の地に唯座しているわけもなく、常に東京の地と交流し、着々と女子音楽園の設立を進めていた」〔山本 1978〕という記述があり、僅か一年半の島根滞在だったが、積極的に松江市に東京の音楽文化を導入することを試みたとも考えられる。

4 楽隊の普及

おそらく高等音楽隊に刺激されたのだろう。翌年から音楽隊の記事が頻出し始める。どうやら、町中に楽隊が出現したらしい。次の記事は、盆の様子を綴ったものだが、明治 37 年（1904）の盆は大変賑やかだったようであり、松江市の音風景の変わり目を辿ることができる。

一昨夜十二時の■計の鳴るのを境として^{さくけう}昨晩にかけては市内各戸^{じやうれい}共常例により夜を更かして思ひ思ひに水辺へ仏送りを為したる事なるか〔、〕同夜例の音楽隊連中も各町に負けず劣らず涼みかてらに舟を浮べて稽古せし事故〔、〕湖中の嫁ヶ^{いんど}島杯へ迄舟で送られ給ひし精霊達は月は好し風は涼し其上耳新らしき音楽さへ聞かされて談笑の間に十万億土へお返りありし事と覚えられたるか〔、〕一体今度の盆中は盆踊なんてい蛮声を唯だの一ツも聞かされさりしは嬉しく〔、〕是も例の音楽隊を耳障りのものだと小言をいふ神経質の人でさへ青年か盆踊りの愉快を音楽の

方へ転せしお蔭かと思へは小言も撞かれず云云とは夜更けて大橋の上での立咄の盗聴〔無記名 d 1904〕。

この時に音楽に満ちた環境というものが人々の間に浸透したと考えられる。あるいは連日のように続く音楽隊の演奏によって、むりやり音楽に慣らされていったとも考えられる。また、もう一つ指摘できるのは、このような音楽隊のあり方を望ましいとする市井の人の意見を新聞が掲載したことである。新聞を読んで同意する人は、自分の意見を強く持つのではないだろうか。そして、楽隊のメンバーは自信を持って演奏するのではないだろうか。

楽隊の猛練習は、戦捷（勝）記念行列で勇ましい姿を見せたいがゆえのものであった。新聞の読み切り短編小説に提灯行列を描いたものがあり、当時の松江市における行列の有様を知る手助けになる。次の通りである。

いままでうきなみ
今迄浮波と忘れて居た行列は最早威勢よく通りかかった。

行列の真先きは、町内での騒ぎ屋紋助を提灯頭にして、〇〇町と字太く染分けた大旗に日章旗、海陸軍旗、帝国万歳の大行灯は一際目立つて、意匠の程度思ひ遣らるる軍歌に浮いて居たが、中にも若い衆から年寄子供ともがらの輩に至る迄、つい鉢巻せきまきに赤提灯、勢よく振り立てる。その■は、是こそ松江第一と丹精こつた音楽隊の一群、運動服に鼻頬冠おつ、紺の兵児帯おつに異（原文ママ）と粹いきとの花を見せて、笛に太鼓にラッパに小太鼓、ヒーヒードロドロテンテコテンと、打てや囃せや吹けや叩けの音頭おんどうこみ声は年寄株おんどうこみが今日をせんの若返りで、熬せ戦勝の余沢は無限の力を云て国民を曳ひき立たせるものである〔津舟 1904〕。

「運動服に鼻頬冠、紺の兵児帯」という珍妙な出で立ちが興味深い。また、笛、太鼓、小太鼓、ラッパが用いられたことがわかる。しかし、少し距離をおいて眺めると見えてくるのは、伝統的な祭りの行列との類似である。神輿行列をもとにして近代的な儀式を作り上げたのではないだろうか。場合によっては邦楽器と洋楽器を組合す工夫がなされていた可能性さえある。また、活躍しているのはいわゆる若い衆であり、神輿を担ぐような人々と推測される。

さらに楽隊が町内会ごとに組織化されていたということもこの考え方を補強する。次の文章は、遼陽占領戦捷記念行列の報道であり、行列に参加したグループの一覧である。

県庁及び市役所の行列係、相撲団体、修道館、商業、師範、農林、中学各校〔、〕元材木、東茶、堅町、宇町、末次、八軒屋、和多見、白潟本町、灘町、乃木、松江分西部、天神、新町、松江分伊勢宮、殿町、新材木、片原、紙屋、内中原、末次魚町、横浜、末次本町、北堀、中原、寺町、白潟魚町、津田街道、洋服組合、第三銀行、石橋〔無記名 e 1904〕。

続く「楽隊なき町 末次本町、西茶、末次魚町なりし」〔無記名 e 1904〕という一節から、ほとんどの町内が楽隊を組織していたことがわかる。

ところでこの記述から楽隊の数も推し量ることができる。町や団体の数から判断するとかなりの大音量を発したのではないだろうか。さらに、次の引用から、楽隊は行列の間ずっと音を鳴らし続けたことが判明する。

楽器衣服に精粗あり装飾に巧拙あり吹奏に緩急あれども概して楽隊が此行列の試験場に於て積日の鍛錬を顕はし毫も非曲に類したる音を発せず士気を鼓舞するの音を以て情容もなく終始せしは称賛するに足る〔無記名 e 1904〕。

行列には町中の人々が参加するから、当然ながら長時間に及ぶ。次の記事は行列の次第を記したもののだが、開始から撤収までに5時間を要していることが判明する。楽隊は、猛烈に喧しいものであった。

各学校は津田街道に各町有志は西津田松原に屯集したるか八時三十分に至り左の順序にて進行せり〔。〕其後殿の該地を発程せしは九時四十分なりき——中略——斯くて行列は既記の順路を経て二の丸練兵場に集合し各町の技量を音楽に顕はし一斉に万歳を三唱したる声城郭に響き天守閣崩るるもやと疑はれ遠く遼陽の我軍に達せんかと思はるるばかり〔。〕退散せしは翌午前二時なりし〔無記名 e 1904〕。

なお、図3は祝捷会を伝える彙報の全文である。町を挙げての盛大な祝祭であったことがわかる。中央の図版は山陰新聞社。派手な電飾のまわりに集う多くの人々を認めることが出来る。

ただし、残念なことに、行列において楽隊がどのような曲を演奏したのかということは、ここでも不明である。当時の新聞広告に『日露軍歌』（大和田・田村 1904）というものを見出す程度である（無記名 a 1904）。おそらくこれが使用されたと思われるが、確証は無い。残念ながら、演奏技術に関しても不明である。「毫も非曲に類したる音を発せず士気を鼓舞するの音を以て情容もなく終始せし」〔無記名 e 1904〕という条りから、なんらかの勇ましい旋律が、それなりに上手く奏でられていたと推測される程度である。楽器に関しては松江市内の楽器店が吹奏楽の楽器セットを販売していた。図4の通りである。

他に広告は無いので、おそらくこれを一式買い込んで楽隊を結成したのであろう。興味深いのは、クラリネットと打楽器でセットが構成されている点である。従来の日本の太鼓や笛の知識を援用して手軽にこれらの楽器を操ることが想定されていたのではないだろうか。また、楽器セットの値段は大太鼓1、小太鼓1、シンバル1、クラリネット6のセットで30円。金管楽器のオプションをつけると、ホルネット28円、アルト30円、バリトン40円〔無記名 j 1904〕。封書が3銭、葉書が1銭5厘という当時の物価状況から換算すると相当高価な物である。商品の性格上、一人で購入するというよりも、団体に購入したのではないだろうか。全くの類推だが、「楽隊がないのが〇〇町」という報道もあり、金券に係わると競って町内会で楽器を購入した可能性も考えられる。

当時の日本は日露戦争の戦捷による熱狂の渦と化していた。当時の新聞は連日火に油を注ぐように景気の良い報道を続けて人々を方向付け、誰もが一体になって勝利を祝していった。この流れに乗って勝利を祝って何が悪いとのべつ幕なしに吹き鳴らされる大音量の楽器は、市井に衝突を引き起こしていった。



〔図4〕簡易樂隊八人組（大太鼓—小太鼓—シンバル—クラリネット六本）〔無記名 i 1904〕

当市松江分木谷万助は去十三日夜天神飲食店神門イク方に登楼しチビチビ酒を飲み居る処へ天神辺の音楽隊員数名が楽器を携へて登楼し之も飲みながら矢張り練習をなすに〔、〕万助は苦々しく思へ突然襖を排して其処に現はれ失礼なお尋ねだが貴下等は何の為に音楽の練習を為さるぞと問掛けしに〔、〕隊員等は反身となり知れた事ったね—か提灯行列の音楽隊員だ旅順の陥落が待遠うしさに斯うやって愉快に練習するのが何の不思議だと腕巻きして答へながら大盃でグット引ッかけしに〔、〕万助はそれは結構だが斯かる飲食店に登楼して俗歌を歌つて合奏するなそは不名誉でないか宜ろしく中止すへし達てやるのなら警官に告げて差留めさすべしどうぢやと威丈高みだけだかになつて諫責かんせきしければ〔、〕一同大に激昂おほいし籠棒べらぼうめさういふ貴様もこんな処で飲んでるぢやないか何処で飲まうと何処で飲んで楽器を弄し様と此方の勝手だ出過ぎた事ぬかを吐すないナニ体面に関する馬鹿をいへと総起ちとなり万助を袋叩きにしければ〔、〕万助は辛うして血路を開き逃走しけるより一同は音楽隊員万歳の声を揚げたりとか〔無記名 c 1904〕。

これまでほとんど表面化することの無かった大きな音に迷惑している人々の姿を認めることができる。また、戦捷を祝福する樂隊の暴走は、皮肉なことに名誉の負傷者も苦痛を与えることになった。

忠勇義烈なる将卒か各地に転戦して殊功を奏し不運なるは名誉の戦死を遂げ將た傷創しやうらみを負ひ其他病に罹りて後送せられつつあるが〔、〕一たび広島予備病院を慰問するときは其激戦に参加して勇敢なる動作を窺ふと同時に其負傷と病痾びやうあの苦痛に坐る同情を禁し得ざるに此事情を知ら

さるにや [、] 旅順陥落の戦捷提灯行列に天晴音楽の技量を誇らんとて毎夜町内を巡りて練習するものあり [。] 殆んど耳を聳せんはかりの喧噪を極め甚しきは松江病院の四周を歩み病者を包围攻撃するか如く騒動を演し為めに発熱呻吟する由にて其家族は固より看護婦迷惑一方ならずと云ふ〔無記名 g 1904〕。

病人にとって勇壮快活な音楽は苦痛以外の何物でもなかったようである。場合によっては病気や怪我を悪化させるまでに至った。

既記せる如く音楽隊が松江病院附近を四周して在院患者に苦痛を与へ更に深更^{しんかう}まで病院前の柳樹の下に屯^{たむろ}して二組以上の俄音楽師^{にはかおんがくし}が合奏する等喧噪一方ならず [。] 現に或る脊髓患者か局部を刺激せられ一週間高熱連続し音楽の響起る毎に身慄^{みふるひ}し又内科患者にして回復期に赴きし者が毎夜音楽はイヤだイヤだと叫び為めに熱を起すに至れる〔無記名 h 1904〕。

ここまで来ると、騒音に苦しめられている人々を傍観するわけには行かなかったのだろう。さっそく対策がとられた。

雑賀倶楽部にては近來少年輩が祝勝会の練習と称し夜中隊を組み樂を奏し又は軍歌^{とな}を唱へつつ市内を練り行くは時局に対して不遠慮の仕方なるのみならず自然怠惰放逸の悪習を醸し教育上不躉弊害を生ずるものと認め [、] 町内有力者に向ひ少年に懇諭方を依頼せりと〔無記名 f 1904〕。

興味深いのは、厳肅さに照らし合わせて問題があり、青年の健全育成において問題であると、音というよりも振舞い方の問題として処理された点である。多少の苦痛はあるものの景気付けに音は欠かせないという暗黙の判断ではないだろうか。そしてこの対策は成功した。「同所附近の有力者は本紙の記事に顧み青年^{かいちよく}を戒飭せしを以て看護婦の労功俄然顕著なるを見らると云ふ」〔無記名 h 1904〕。おそらくこれら一連の問題とその対策は、音環境に関して理解を深めることに繋がったに違いない。

なお、『山陰新聞』には東京における大祝捷会の有様も報道されている。松江市の行列に4ヶ月先立つ同年の5月13日に新聞社雑誌社通信社の発起により行われた行列であるが、次のようなものである。

一発の煙火を合図に一同は [日比谷公園内運動場の] 正門より繰り出し帝国議會議事堂前より芝久保町通りに出で新橋を渡りて銀座通りに出で夫より鍛冶橋を渡り馬場先門より宮城正門前に至り [、] 一同大元帥陛下の万歳を三唱し夫より陸軍省参謀本部外務省海軍省等を経て日比谷公園に帰り散会せしは十時過る頃なりき〔無記名 b 1904〕。

参加者は30万人。「行列行進中は陸軍軍楽隊の奏楽あり [。] 公演にては絶えず煙火を打ち揚げて景気を添へ沿道の各戸は夫々国旗球灯を出して祝意を表」〔無記名 b 1904〕した。

松江市の人々がここから全く影響を受けなかったと考えるのは難しい。行列の手本の一つにした

に違いない。そして、日比谷公園に集まった人々と同じ行動を取ることによって、いつのまにか喜びのうちに臣民に組み込まれていく姿を観察することができる。楽隊は、一方で町の祭りに繋がりながら、他方では軍楽隊を思い起こさせるものであり、吹鳴は近代化を加速させていく。

5 郡部への波及

松江市における初期の楽隊の様子を新聞記事から追ってみたが、これらのことをきっかけに楽隊は松江市に定着していったようである。そして、音楽に満ちた音環境もありきたりの風景になっていったのではないだろうか。その後もしばしば楽隊に関する記事を見出すことが出来る。特に翌明治 38 年 (1905) の日本海海戦の戦捷祝賀会の際に著しい。これまで言及してきたものと同じような行列が行われ、楽隊も大活躍したようである。次の例は松江市における船行列の様子である。

湖上^{ふなぎやうれつ}の船行列 予記の如く一昨日市内各町にては球灯にて夫々意匠を凝したる船を薄暮より権現沖^{こんげんおき}の湖上に繰出したるが〔、〕天神町の如きは軍艦三笠に擬して小船三四艘も繋ぎ幔幕を蔽ふて無数の紅灯を吊し煙突マストまでも現はしたるは軍艦のイルミネーションの如くありき〔。〕其他新材木の先頭船に楽隊を乗せて〔無記名 a 1905〕。

演奏技術に関しては「頓^{やが}て白濁本町音楽隊の君ヶ代の音楽嘲哢として鳴り渡りし」〔無記名 b 1905〕という文章があり、《君が代》を演奏していることがわかる。

当然ながら、祝捷会は郡部でも活発に行われている。城山公園で行われた浜田町（現在の浜田市）の祝捷会の例だが、ここでも音楽隊は行列に貢献した。

官民有志者は六日午後四時より城山公園におゐて海戦祝捷会を開きたり〔。〕会場の入口には大国旗を交叉し中央の大樹木より四方に各国旗を吊して装飾となし第一砲号にて会員登山の合図を為せば〔、〕文武高等官其他官民有志者五百余名東より西より南より北より公園指して到れり〔、〕而して高等尋常小学校生徒一同は三時に各校に集合し夫より各職員に引率せられ登山せり一中略一小学生徒は音楽隊に連れて君が代の唱歌を奏し猪股郡長の発声にて天皇陛下の万歳を三唱し次で音楽隊は海軍の音楽を奏し了^{をは}りて陸海軍の万歳を三唱〔無記名 c 1905〕。

あるいは、広瀬町（現在の安来市）でも楽隊を伴う祝捷会が地域で行われている。

去一日午後能義郡役所門前に於て行ふ会するもの無慮千余名〔。〕楽声の裡に厳肅なる儀式を行ひ万歳を三唱し終て一同天場鼻に到り球灯に点火し楽隊を先頭として隊伍^{たいご}肅々提灯行列を催せるが延長数町に涉り一中略一当日町内には二和加等の賑あり非常の盛況なりしと〔無記名 d 1905〕。

ただし、すべての町村が楽隊を持っていたというわけではなかった。しかしながら、祝捷会が行われなかったというわけではない。次の引用は邑智郡矢上村（現在の邑智郡邑南町）の事例である。

田植囃子や神楽舞、浄瑠璃など、伝統音楽が息づいている。楽隊を利用しない町村がどの町村でもこのような具合であったのかということは一概には言えないが、学童の鼓の音を思い浮かべるならば、楽隊が音風景をすっかり変容させたことが確認できる。

去る二日諏訪神社境内において広大なる庭の周囲には万国旗を吊るし先ず報告祭を行ひ次で大島学校長同海戦の顛末^{てんまつ}を坐から実践を見るか如く説明して異口同音に快哉万歳を叫はしめたり [。] かくて演説^{をば}畢るや数百頭の肥牛美を粧ふて行列をなし [、] 又に邑智の田植囃子なる数十の愛童鼓を腰にし花笠を載^{をど}て跳る等さしもの広庭も立錫の余地なかりき [。] 尚余興として其夜は神楽舞を七日市原に日貫村一座の浄瑠璃を町に執行して盛大を極めたり [無記名 e 1905]

それでは、郡部にはどのようにして楽隊が広がっていったのだろうか。これに関しては僅かながら八東郡熊野村（現在の松江市）に関する報告があり、一例を示すことができる。楽器購入、教師の依頼から始まっている。担当者が青年会員というのも、これまでの多くの事例と共通する。「八東郡熊野村字宮内区長鈴木久市郎外青年会員十二名協議の結果百円出金して楽器を購入し当市より楽師を聘して日々練習中なるが [、] 上達の上は無報酬にて行^う筈」[無記名 a 1908]。なお、引用中の「当市」とは松江市のことである。松江市には人に教えることができるほどの奏者もいたようだ。熊野村の人々はこの楽師について猛特訓を行ったに違いない。わずか一ヵ月後は同地区で楽隊の演奏が披露されている。

八東郡熊野村婦人会を本月廿二日全村尋常小学校において開く [。] 出席者八百余名 [。] 宮内青年会の組織せし音楽隊の奏楽あり [。] 次で君が代の唱歌を合唱し入江会長は勅語を奉読し次で岩田理事長入江会長長澤村長並に音楽教師の上田氏の講演あり [。] 余興として河合南窓氏の講談あり [。] 次に校庭に於いて青年会員四十余名の仮装行列あり [。] 各異様の扮装をなし非常の喝采を博したり [。] 終て会員に抽選を以て楽み袋を与へ薄暮解散せり [無記名 d 1908]。

唱歌、講談、仮装行列、抽選と盛沢山な内容だが、その中にしっかりと楽隊の演奏も含まれている。吹奏楽の音による君が代は、村の誇りだったことだろう。

記事の中には他にも広く多くの郡部で様々に活用される楽隊演奏の報告も散見される。もっともよく見られるのは幻灯会である。

去三日午後八時より簸川郡上津村（現在の出雲市）尋常小学校において同郡私立教育会附属幻燈会を開催せり [。] 妹尾村長の開会の挨拶に次で 両陛下並に貴顕御肖像^{ほび}を首め高野学校長説明の下に続々映出し尚郡視学の依頼に基き高等小学校に入学並に出席の奨励をなし [、] 次ぎに大国主命の事歴により教育勅語の内容 [、] 最後に日本海戦につき詳細に説明し多大の感動を与へたり [。] 殊に音楽隊の爽快なる合奏あり [。] 約八百名の参集者は始終静肅に熱心に聴講し近来希れる盛況を呈し午後十一時卅分頃閉会せり [無記名 f 1905]。

あるいは次の例は安濃郡（現在の太田市）での運動会である。競技の合間に演奏されたことがわかる。

午前九時各学校の生徒は楽隊を先頭として会場に集合す—中略—設備も殆んど遺憾なく整へ
競技と競技の間の迅速 [、] 若もその間唳々たる楽隊の音は松吹く風磯打つ波に相和し余韻^{でうでう}嫋々
渡津海の潜蛟をも躍らしむるが如く参観人の耳目を傾けしめたり [無記名 1907]。

記念祝賀会の後の宴会においても楽隊が活躍して、ここでは、音環境を作り出す楽隊を認めることができる。

去る二十三日午前九時簸川郡平田町（現在の出雲市）尋常小学校訓導杉原万太郎の十年勤続祝賀会を全校に於て挙行せり [。] 非常の盛会にて会するもの七名来賓<sup>郡長代理伊藤郡書記三島町長木佐常松洲学務委員
長崎学校校長佐高等小学校校長河瀬元尋常小学校校長</sup>等にして勇しき楽隊と共に一同着席 [。] 君が代唱歌合唱飯塚校長の式辞あり [。] 郡長の慰勞金辞令授与及祝辞に次で管理者来賓職員総代等の祝辞ありて有志者及卒業生は記念品及感謝状贈呈す [。] 杉原訓導の答辞ありて全校生徒は校歌を合唱し式を終るや席を坂本樓上に移し祝宴会を開催せり [。] 会する者約三十名 [、] 先づ各氏の祝辞演説ありてより換杯頻々絶えず楽隊の奏楽あり [。] 酒酣にして種々の余興続出し興味津津十二分の快を尽して散会せしは午後十一時頃なりしと [無記名 b 1908]。

おそらく、全県的にこのような音風景が広がっていったと考えられる。

ただし、その後もしばらく続けて楽隊に関する新聞記事を調査していくと、徐々に減少し始めることに気づく。幻燈会の記事も轍を一にする。幻燈会が行われなくなり伴っていた楽隊演奏が減少したとも考えられるし、イベントや儀式の際の楽隊の活動があまりにも日常的なものになってしまったので、特に報道されることがなくなったとも考えることができる。なお、代わって漸増するのが演奏会と映画の記事である。

最後に松江育兒院と楽隊との関連に触れておきたい。整備が始まったのは明治 36 年（1906）。福島禎三郎氏夫妻の指導である [無記名 1906]。指導者の詳細は不明だが、明治 41 年（1908）の時点で楽隊演奏を行っている記録があるので、練習を積み重ねていることがうかがえる。

去る六日午後七時より本村 [八束郡講武村（現在の松江市）] 尋常高等小学校において松江育兒院救兒隊の主催に係る慈善幻燈会を開く [。] 先づ福田院主開会の挨拶に併せて育兒院の趣旨、院内の事業報告ありて幻燈活動写真あり [。] その間全院救兒隊より成れる音楽隊の合奏ありて盛会なりきが観覧者無慮四百余名なりき [無記名 c 1908]。

また、明治 42 年（1909）の 4 月から「大阪鈴木音楽隊に入り専ら斯道を研究し技量大に熟達」 [無記名 1910] したらしい。そして、明治 43 年（1910）の春より秋にかけて、台湾・南清地域を演奏旅行で回り、11 月 20 日に帰国。「今後巡業の余暇を以て儀式広告等の依頼に応じて演奏すべし」 [無記名 1910] という記事がある。おそらく商業的な活動の楽隊となったのではないだろうが。

山陰家庭学院に関しては、詳細は不明である。幾らか言及はあるものの、楽隊に関してはまとまった記述を見出すことができなかった。今後の課題にしたい。

まとめ

明治期末の松江市における音環境を楽隊の活動という観点から新聞記事をもとに整理したが、戦捷行列の隆興に伴って楽器が普及し、楽隊が広まっていく姿を認めることができる。また、楽隊によって音環境を豊かにする試みを指摘することができる。あるいは世論によって楽隊の増長が制御され、音環境が調整される事例を指摘することができる。楽隊の普及の下地となったのは、邦楽のレパートリーや祭り行列のような従来の音楽・芸能文化であり、華やかな戦捷行列の報道のようなメディアの効果も指摘することができる。新聞記事は外の音楽世界を魅力的に映し出し、日常の営みを取捨選択して強めつつ再現する。

最後に課題として残るのは、近代日本音楽史を記述する際になぜ地方の音楽文化の状況が見過されてきたのかということかもしれない。確かに、新潟〔田中 1977: 647-649〕のように軍楽隊退役軍人が音楽文化の涵養に尽力した地域もある。しかしながら、ほとんどの地域が軍楽隊および高度な技術を有する吹奏楽団による定期的な公園楽の埒外であったことを考えると、多くの日本の地域は、むしろ松江市のような状況に近かったのではないだろうか。『北海道音楽史』には北海道における楽隊の状況に関して比較的詳細な記述があるが〔前川 1992: 82-91〕、札幌市に札幌音楽隊ができたのが明治 38 年（1905）年だった。地方における音楽文化の研究が待たれている。

補記

1. 印字が不鮮明で判読できない活字は「■」で示した。
2. 旧字体は新字体に直した。
3. 適宜句読点を施し、ルビを加えた。
4. 濁点は原文のままとした。

参考文献

- 石井十次 1969 『石井十次日誌（明治 31 年）』、宮崎、石井記念友愛社。
大和田建樹・田村虎蔵 1904 『日露軍歌』、東京、郁文館。
菊池義昭 1997 「岡山孤児院の音楽幻燈（活動写真）隊の活動と養護実践のかかわり 研究の目的と全体的動向を中心に」『共栄児童福祉研究』、共栄学園短期大学社会福祉学科児童福祉学専攻。
田中勇市 1977 「吹奏楽連盟」、新潟市音楽芸能協会編『新潟市音楽芸能史』、新潟、新潟市音楽芸能協会。
塚原康子 2001 「軍楽隊と戦前の大衆音楽」『プラスバンドの社会史 軍楽隊から歌伴へ』、東京、青弓社。
津舟 1904 「提灯行列」『山陰新聞』明治 37 年 8 月 10 日、山陰新聞社。
堀内敬三 1942 『音楽五十年史』、東京、鱗書房。
前川公美夫 1992 『北海道音楽史』、土別、前川公美夫。
無記名 a 1898 「岡山孤児院」『山陰新聞』（山陰新聞社）明治 31 年 6 月 2 日。
無記名 b 1898 「幻燈音楽隊」『山陰新聞』（山陰新聞社）明治 31 年 6 月 7 日。
無記名 c 1898 「安濃教育会」『山陰新聞』（山陰新聞社）明治 31 年 7 月 5 日。
無記名 1902 「教育幻燈会」『山陰新聞』（山陰新聞社）明治 35 年 10 月 16 日。
無記名 a 1903 「安濃郡教育幻燈会」『山陰新聞』（山陰新聞社）明治 36 年 1 月 14 日。
無記名 b 1903 「教育幻燈会」『山陰新聞』（山陰新聞社）明治 36 年 3 月 3 日。
無記名 c 1903 「博覧会画報 協賛会余興歌舞」『山陰新聞』（山陰新聞社）明治 36 年 6 月 10 日。
無記名 d 1903 「高等音楽隊」『山陰新聞』（山陰新聞社）明治 36 年 7 月 22 日。
無記名 e 1903 「父兄会と幻燈会」(山陰新聞社)『山陰新聞』明治 36 年 7 月 31 日。

- 無記名 f 1903 「高等音楽隊」『山陰新聞』（山陰新聞社）明治 36 年 8 月 8 日。
- 無記名 g 1903 「松江音楽隊開会式」『山陰新聞』（山陰新聞社）明治 36 年 11 月 5 日。
- 無記名 h 1903 「松江銀行園遊会」『山陰新聞』（山陰新聞社）明治 36 年 11 月 5 日。
- 無記名 i 1903 「県立第三中学開校式」『山陰新聞』（山陰新聞社）明治 36 年 11 月 7 日。
- 無記名 j 1903 「音楽隊」『山陰新聞』（山陰新聞社）明治 36 年 11 月 15 日。
- 無記名 k 1903 「師範学校校友会」『山陰新聞』（山陰新聞社）明治 36 年 11 月 23 日。
- 無記名 l 1903 「赤十字能義委員部総会」『山陰新聞』（山陰新聞社）明治 36 年 11 月 25 日。
- 無記名 m 1903 内閣官報局編『職員録』、東京、内閣官報局。
- 無記名 a 1904 「図版入り広告」『山陰新聞』（山陰新聞社）明治 37 年 2 月 27 日。
- 無記名 b 1904 「東京の大祝捷会」『山陰新聞』（山陰新聞社）明治 37 年 5 月 13 日。
- 無記名 c 1904 「音楽隊員の袋叩き」『山陰新聞』（山陰新聞社）明治 37 年 6 月 16 日。
- 無記名 d 1904 「盆と音楽隊」『山陰新聞』（山陰新聞社）明治 37 年 8 月 27 日。
- 無記名 e 1904 「松江市祝捷彙報」『山陰新聞』（山陰新聞社）明治 37 年 9 月 8 日。
- 無記名 f 1904 「少年音楽の弊風」『山陰新聞』（山陰新聞社）明治 37 年 9 月 27 日。
- 無記名 g 1904 「喧噪なる音楽隊」『山陰新聞』（山陰新聞社）明治 37 年 9 月 28 日。
- 無記名 h 1904 「音楽、病人を悩ます」『山陰新聞』（山陰新聞社）明治 37 年 9 月 30 日。
- 無記名 i 1904 「図版入り広告」『山陰新聞』（山陰新聞社）明治 37 年 10 月 23 日。
- 無記名 j 1904 「図版入り広告」『山陰新聞』（山陰新聞社）明治 37 年 11 月 3 日。
- 無記名 a 1905 「松江市祝勝会雑況」『山陰新聞』（山陰新聞社）明治 38 年 6 月 9 日。
- 無記名 b 1905 「松江市海戦大祝捷会」『山陰新聞』（山陰新聞社）明治 38 年 6 月 9 日。
- 無記名 c 1905 「浜田特信（6 日）」『山陰新聞』（山陰新聞社）明治 38 年 6 月 9 日。
- 無記名 d 1905 「広瀬町祝捷会」『山陰新聞』（山陰新聞社）明治 38 年 6 月 10 日。
- 無記名 e 1905 「祝捷会」『山陰新聞』（山陰新聞社）明治 38 年 7 月 8 日。
- 無記名 f 1905 「幻燈会」『山陰新聞』（山陰新聞社）明治 38 年 11 月 11 日。
- 無記名 1906 「松江育児院記事」『山陰新聞』（山陰新聞社）明治 39 年 11 月 14 日。
- 無記名 1907 「安濃郡小学校連合体育会」『山陰新聞』（山陰新聞社）明治 40 年 10 月 10 日。
- 無記名 a 1908 「熊野村の音楽隊」『山陰新聞』（山陰新聞社）明治 41 年 2 月 18 日。
- 無記名 b 1908 「十年勤続祝賀会」『山陰新聞』（山陰新聞社）明治 41 年 2 月 27 日。
- 無記名 c 1908 「八束郡講武村通信 慈善幻燈会」『山陰新聞』（山陰新聞社）明治 41 年 3 月 13 日。
- 無記名 d 1908 「諸会一束」『山陰新聞社』（山陰新聞社）明治 41 年 3 月 25 日。
- 無記名 1910 「少年音楽隊」『山陰新聞』（山陰新聞社）明治 43 年 10 月 24 日。
- 無記名 a 1911 「子供博覧会（七日目）」『山陰新聞』（山陰新聞社）明治 44 年 5 月 23 日。
- 無記名 b 1911 吉岡勘之助編『島根県私立教育会雑誌 子供博覧会記念号』（島根県私立教育会）287 号。
- 無記名 1978 豊島音楽会編『音楽文化の曙』、東京、表現社。
- 山本寿賀子 1978 「追憶の父 無言の温情」、豊島音楽会編『音楽文化の曙』、東京、表現社。
- 吉見俊哉 1992 『博覧会の政治学 まなごしの近代』、東京、中央公論社。

The soundscape of Matsue city in the late Meiji period : In connection with the diffusion of marching bands

UENO Masaaki

This paper deals with the soundscape of Matsue city in the late Meiji period. I clarify the process leading to the diffusion of marching bands around Matsue city and how this both stimulated interests in the musical environment and generated a desirable musical environment. Firstly, I focus on a charity concert held at the Okayama Orphanage in 1898.

This was one of the earliest marching band concerts in Matsue city. Secondly, I focus on the activities of higher level marching bands organized by TSUTSUMI Masao, who was then a music teacher at a normal school. This was the first fully-fledged marching band in Matsue city and achieved successes in both ceremonial and field events. Thirdly, I will discuss the diffusion of amateur marching bands in Matsue city and how the volume of the music was considered to be a social problem. Finally, I mention the spread of marching bands in the rural district of Shimane Prefecture.

Keywords: soundscape, Simane, acceptance of Western music, wind-instrument music, Japanese music

